

## 和光会会報No. 47

—菱電サービス（菱サ）～三菱電機ビルテクノサービス（MELTEC）本社OB会—

### ◆ 佐用姫の恋に想う …… (2016-08) —山本拓弘さんから投稿頂きました—

今回も4年前に九州を旅した時に想った話です。

自分は、今まで恋などというものについて語ったことがありません。けれども、一度も想わなかったというわけでもありません。普通の人間ならば、誰でも恋の一つや二つは背負わなければならない、これは人間の業(ごう)というものなのかもしれません。生涯に一度も恋について悩んだことが無い人がいるとすれば、それは幸せというよりも哀しい人ということになるように思います。この話は、今から千五百年も前の恋についての話です。そして、真老（75～85歳）の老人には、柄にもないとんだ話です。

九州を巡る旅で、久しぶりに佐賀県の唐津市郊外にある鏡山に登りました。鏡山の展望台から、下方長く伸びる虹の松原とその先に光る海を眺めたいと思ったからでした。白砂青松を謳う海辺の箇所は、全国に幾つかありますが、主役の松の樹たちが最高に元気な松原といえば、自分の知る限りでは、この虹の松原において他にないように思います。今は日本中の多くの松の樹が、何らかの災厄に見舞われてなのか、枯死するものが増えていると感じているのは、自分だけの思い過ごしならば幸いです。この頃全国の至る所で赤く枯れて立ち尽くしている松の樹を見る度に抱く感慨です。虹の松原のすぐ脇には国道が走っており、ここからは砂原に茂った松の樹だけしか見えないのですが、鏡山に登るとその松原と砂浜の描きだす稜線の素晴らしさが俯瞰できるのです。

鏡山への登り道はくねくねと曲がっており、車の運転には気を使いました。でも道の両側にはたくさんの桜の木が植えられていて、丁度今が花の満開の時期で、何ともラッキーなタイミングでした。思いもしなかった花を愛でながらの登り道は、まるで天国が極楽浄土への道のような感じでした。鏡山の頂上は広い公園となっており、そこにもたくさんの桜が植えられていて、随所に花が満ち溢れていました。桃源郷は桃の花ですが、ここは桜の花の世界、だから桜源境とでも言ったら良いのでしょうか。大勢の人たちが花見に訪れ、昼時の木の下にはあちこちで花を愛でながら一時の宴を楽しむ人たちの歓声が膨らんでいました。この頃久しく忘れていた日本らしい世界が広がっていました。気まぐれな旅の寄り道としては、何という幸運なのかと思いました。

駐車場に車を留め、まずは直ぐ近くにある鏡山神社に参拝しました。山や丘の頂上にある神社は、多くの場合その山自体をご神体として崇めているものが多いのです。それは人々のその山や丘に対する親近感、敬愛感が高まった最高の心情表現の証なのかも知れません。この鏡山がそうなのかは知らないのですが、やはりご神体にしてしまいたいほど、この小さな山の存在は土地の人たちにとって、ありがたい存在のような気がしました。日本の、何でも神様にしてしまう多神教のスタイルを蔑(さげす)む輩(やから)が居るようですが、一神教といいながら分派が争って本来の神とは無縁の血を流しているような信仰の世界と比べたら、何と素朴で大自然への畏敬の気持ちの豊かなことか。そのような気持ちを批判する輩こそ蔑まれるべき存在ではないかと、そのようなことを思ったりしました。

鏡山は別名領巾振山(ひれふりやま)とも呼ばれています。領巾(ひれ)というのは、古代のご婦人が首に巻く布だといいますから、今の時代ならさぞかし厚手で大型のスカーフといったような物なのかも知れません。そのスカーフを振る山というのは、正確には、「振る」のではなく「振った」山ということになると思います。この領巾(ひれ)を振ったのが松浦佐用姫であり、彼女の見つめるその先に居た人物が、大伴の狭手彦(さでひこ)という若武者であったということです。彼は大和の朝廷から派遣されて、朝鮮半島の任那(みまな)と百濟(くだら)国を救援するために軍船で向かうところでした。今から約千五百年も前の昔の話です。頂上の公園の中に佐用姫の像が造られていて、そこにこの悲しい別れのいきさつが記されていました。



唐津市郊外の鏡山の公園にある佐用姫像。遠く朝鮮半島に向かう狭手彦との別れを惜しんで、領布を振るその姿には、その思いが伝わってくるものがあった。

その説明によると、凡その事情は次のようなことでした。大伴の狭手彦という人物は、往時の日本軍のホープの一人で、日本が百済と任那と組み、唐と組んだ高句麗と対峙して戦った時に多くの戦功を上げたとか。その後任那と百済が劣勢となり、これを支援するために狭手彦が再び派遣されることになり、その出陣の準備をするために唐津の港に滞在していたということです。その時に、彼の身边のお世話をするために召された女性の中に、地方豪族松浦氏の娘の佐用姫がいたのでした。お世話をしている内に二人の間に恋が芽生え、それが熱く燃え上がったのでした。しかし狭手彦は朝鮮半島に向けて出陣しなければならず、愈々その時が来て、佐用姫はこの鏡山に駆け上って、別れを惜しんで、千切れ

るまでに領巾を振ったのでした。軍船が見えなくなると、山を駆け下りて唐津の隣の呼子まで走って、その傍にある加部島までも行って見送ったのですが、もうそこでは彼の乗った軍船を見ることができなかったのです。その別れを悲しんだ彼女は、七日七晩泣き明かした末に岩となってしまったという話です。この伝説は、日本三大悲恋伝説（＝「松浦佐用姫」、「羽衣伝説」、「浦島太郎」）の一つとして今に残っているとのこと。

さて、これだけのことならば、あ、そうだったの、可哀想だね、で終わってしまうのだと思いますが、自分としてはこの話には何故だかそれ以上の何かを感じたのでした。つまり、この恋の重さというか、深さについてなのです。今の時代にもこのような悲恋物語があるのでしょうか。恋人を思って、岩となってしまふほどの女性がいるのだろうか、という疑問です。この話は女性の思いの強さを象徴しているのだと思いますが、今の世の女性の多くは、もしかしたら純粋に相手を恋慕うことなどは忘れ果て、厚い打算にどっぷりとくるまって、損得の計算などをしながら男の選別をしているのではないかと、などと思ったりしたのでした。（これは反論が多いほど嬉しいことでもあります）

自分なりに佐用姫伝説のことをあれこれ想ってみました。先ずこの女性の人となりですが、相当に勝気で、エネルギーな女性だったに違いありません。姫というと、誰でも蕩(ろう)たけた深窓の美人をイメージするのですが、佐用姫は決してそのような女性ではなかったと思います。狭手彦という将校の身の周りのお世話をするには、そのような美人は不向きといえそうです。むしろ野性味溢れた逞しさのある、それでいて心遣いの優しい女性であったからこそ、軍人の狭手彦も心を動かされたのではないのでしょうか。化粧などにばかり気をとられ、己の都合のいいように言動を飾っている美人ぶった女性が、本物の男の心を捉えることができないのは、千五百年前でも今でも同じことのように思うのです。この伝説では、狭手彦のことには何も触れていないので、彼の気持ちがどうだったのかは知る由もありませんが、自分的には狭手彦将校は、これから戦地に赴く自分に対して、誠心誠意を以って尽くしてくれる彼女に、幾つもの感動的な嬉しさ、ありがたさを感じたに違いないと思うのです。軍人とは、その命を戦いに賭ける宿命にあり、一旦戦場に見(まみ)えれば、生きて戻れる保証など何もないのです。そんな男に真を尽くして仕えてくれる女性に好意をもたない男など居るはずがありません。

一方佐用姫からすれば、命がけで海の向こうの国での戦いに出向く、リリしき男の姿に、少しでも何か役立つ、心を安らげることをしてあげたいと、純な気持ちでの奉仕の始まりだったのではないかと思うので

す。それが恋にまで至るには、狭手彦の人となり、働きぶりを見ていてそれほど時間がかからなかったに違いないと思います。もしかしたら、一目ぼれということだったのかも。可能性はこの方が高いような気がします。

愛する者との別れには、様々なケースがあると思いますが、相思相愛という場合の別れが、一番悲しみが深く激しいのではないのでしょうか。片思いなどには、常に別れが付きまっていますから、それが現実となっても耐える心が残るのだと思いますが、本当の相思相愛の場合は、その思いは耐え難いものとなるに違いありません。佐用姫の場合も、もはや離別に耐える心など残っていなかったのではないかと思うのです。彼女の狭手彦を思う情熱は、火の玉となって鏡山を駆け降り、そこでの別れには飽き足らず、更に呼子の加部島まで奔(はし)って、それでも思いきることが出来ず、その強い思いと悲しみの涙は、ついに彼女を岩にしてみましたのでありましょう。何故岩になったのか。それは、岩になれば、不変、不動のままに、いつか帰り、戻ってくる愛しい人を待つことが出来るからなのかもしれません。自分はそのように思ったのです。佐用姫は、なよ姫のような存在ではなく、千五百年も時を経た今でもそこで狭手彦の帰りを待っている、たくましい女性なのであり、彼女はその岩の中で生き続けているに違いありません。

これが自分の佐用姫の恋の解釈です。今回鏡山に登るまでは、この伝説のことは少しも知らず、悲恋などを考えることもなかったのですが、実際に佐用姫岩と呼ばれるものもあり、又鏡山を離れて数日後に、巖木(きゅうらぎ)町(=現在は唐津市巖木町)の道の駅に泊った時、そこが佐用姫の出身地だったというのを知り、この伝説の伝える佐用姫の想いの強さに打たれたのでした。巖木の道の駅の構内には、巨大な佐用姫の白い像が造られていて、それが電気仕掛けで動くようになっているのに気がつき驚かされました。佐用姫の想いが、今の世を360度見渡しながらか、狭手彦を探していることを表現しようと、どなたかが考えたのかも知れません。しかし、今は手入れがされていないのか、薄汚れたままの白衣の像は、佐用姫の心を逆なでしなければ良いがと思ったりしました。現代人は、佐用姫の思いを人寄せのためのダシに使うことなどばかり考えていないで、彼女の清純な精神にもっともっと多くを学ばなければならぬのではないかと、改めて思ったのでした。



巖木の道の駅構内に建っている佐用姫の白像。15mほどの高さがあり、近くから全体像を撮るのは不可能だった。20分ほどで1回転する仕掛けとなっているけど、それに気づかぬ人が多いようだ。薄汚れていて、佐用姫には気の毒だなと思った。

「海原の沖行く船を帰れとか領布振らしむ松浦佐用姫」(万葉集)

[2012年九州の旅から]

## ◆ 会員の趣味のコーナー

今回から第14回和光会総会の展示作品を3回に分けてご紹介いたします。

今回もこれらを始めた時期(年数)・動機、作品を制作しての喜び(感動)、苦労したこと、「他に取り組んでいる趣味」などを含めて紹介いたします。

なお、出展出来なかった方の作品・趣味についても出来るだけ順次ご紹介をしていく予定です。

## ◆ 陶芸(5点)

…… (2016-06) —金山 幸雄さんから投稿頂きました—

今回は①備前焼「布目紋様花入れ」、②備前焼「樹木型香炉」、③半磁「龍紋様片口酒器セット」、④黒泥「龍紋様ピアマグ」、⑤半磁「龍紋様ピアマグ」、⑥半磁「絵皿(白雪姫)」の6点を出品させていただきました。

この中で①と②の備前焼は陶芸を始めたころの初期の作品で、登り窯で焼成した作品です。陶芸を始めたきっかけは学生時代に信楽焼の窯元の友人がいて、何回か遊びに行った際に登り窯と作品を見せて頂き、ただの土が釉薬を使わずに薪の灰だけで見事な作品に変化するのに魅せられ、いつか自分でもやってみようと思っていたからです。

ただ、都市部では登り窯で焼成しているところはほとんどなく、当時神奈川県金沢八景にあった備前の土を使う陶芸教室が唯一あった程度で、そこにお世話になることにしました。

登り窯は電気窯やガス窯と違って焼成に手間がかかり、4昼夜ぶっ通しで薪を炊き続けるため、交代で



① 備前焼「布目紋様花入れ」



② 備前焼「樹木型香炉」

温度管理をしながら炊き続けました。手間がかかるだけあって、1週間程度窯を冷やしてから作品を取り出すときはどんな作品に仕上がっているか楽しみで、皆で料理と酒を用意し、焼きあがった作品を批評しあいながら和気あいあいと楽しいひと時を過ごしたものです。

今回の①と②の作品は比較的備前特有の火色(ごま・さんざり)が出ていると思いますし、①の花入れは壺の表面に布目の紋様を貼り付ける細工を施してみました。また、②は樹木の根っこをイメージした香炉で、樹皮と木肌を表現するのに手間がかかりました、蓋の取っ手にはクワガタを付けて面白味を出してみました。内部は棒状と円錐型のいずれの香にも対応できるように工夫してあります。いずれも当時を思い出す懐かしい作品です。

作品に細工を施すようになったのは、登り窯は手間がかかるだけあって材料費が高く、土代が当時1kg



③ 半磁「龍紋様片口酒器セット」



④ 黒泥「龍紋様ビアマグ」



⑤ 半磁「龍紋様ビアマグ」



⑥ 半磁「絵皿(白雪姫)」

¥4,200+ $\alpha$  (焼成費込み) がかかるため、むやみに数多く作品作りができないので、一つ一つの作品に色々細工を施し、手間と時間をかけて作り上げるという風潮が仲間の中にもありました。

作品に細工を凝らす作風は今も続けていますが、登り窯教室は転勤をきっかけに辞めましたが、その後先生の病気に伴い閉鎖されたとのことでした。

③～⑥は最近の作品で、4年前からお世話になっている横浜市の陶芸施設の設備を使わせてもらって焼いたものです。

使える土が限られているため、備前の土は使えませんので、黒泥と半磁という土を使って作品作りを行っています。現在龍紋様の細工にハマっていて、色々な表情づくりを楽しんでいます。③は半磁土を使った片口の酒器で、取っ手に龍が酒を飲もうとしている様を、そして片口の側面にも龍が火を噴いている様を表現してみました。また、セットにしたぐい呑みも龍の横顔をあしらってみました。いずれも釉薬は「唐津」を使って還元焼成で焼いています。

◆ 木彫刻 (2点)

..... (2016-06) —小藤 俊雄さんから投稿頂きました—

①「弥勒菩薩半跏像(広隆寺)」(桧)

②「レリーフ・伎芸天」(桧)



広隆寺の弥勒菩薩は人気もありよく知られていますので皆さんのコメント気になりますね。

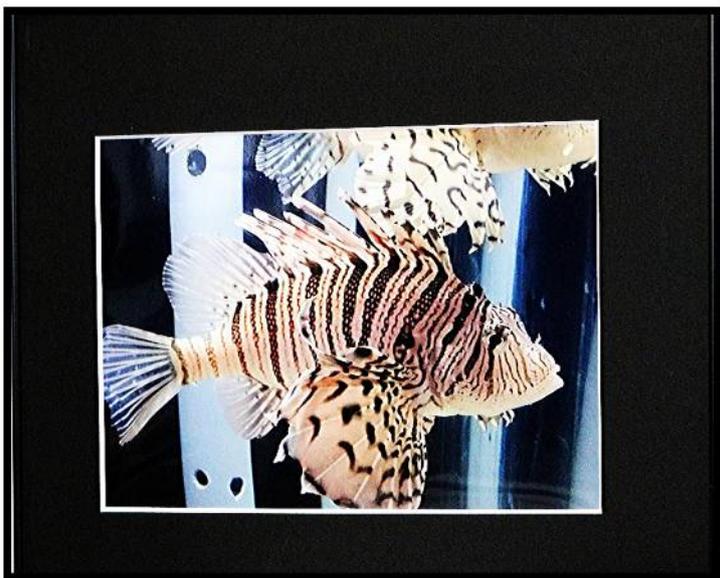


仏像と言えば堅苦しくなりそうなのでレリーフを作ってみました、ちょっとした部屋のアクセサリーにどうでしょうか。

◆ 写真・工芸品 (漆塗製品)

..... (2016-06) —和田 昭喜さんから投稿頂きました—

写真「海の貴婦人」



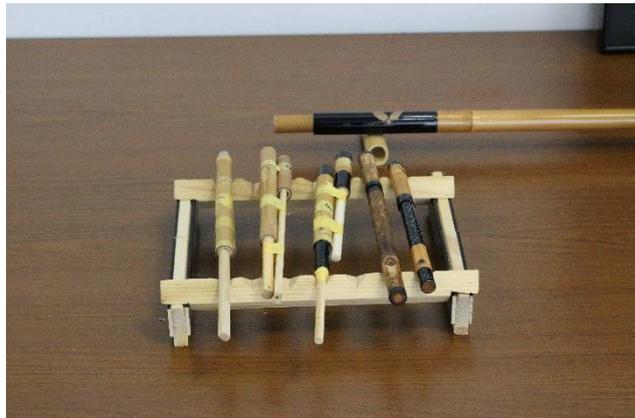
息子の家族四人と伊豆の海洋公園に行った時に水槽越しに撮影した『カサゴ』です。

## 工芸品（漆塗製品）

### ① 「ボールペン」



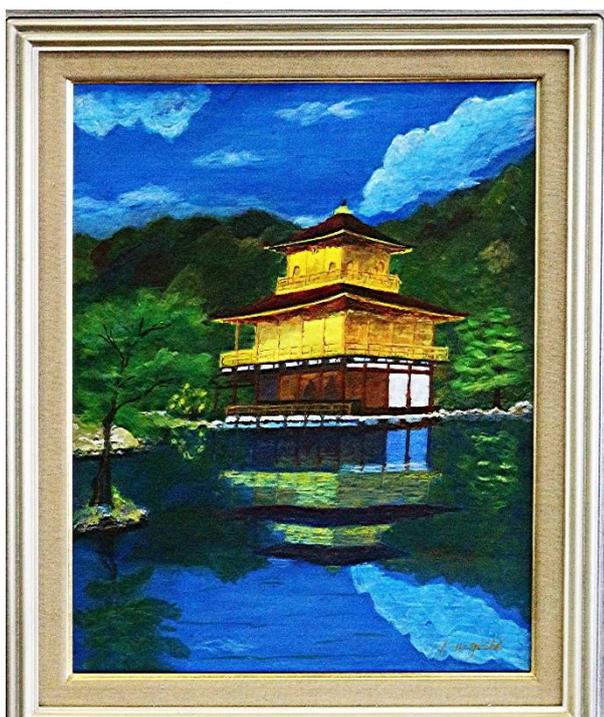
### ② 「蒔絵へら竿」



今年もへら竿を製作しました。蒔絵を勉強中です。家紋を金蒔絵であしらいました。

## ◆ 水彩画（アクリル）

### 鏡湖池に映る金閣寺



…… (2016-06) —樋口 義三さんから投稿頂きました—

久し振りに帰阪時、京都まで足を延ばし金閣寺を見学、豪華絢爛金色に輝く、又鏡湖地に水面に揺れ映る姿を見て描きたくなりました、色合いが難しく苦勞をしましたがなんとか仕上がり、出品させて頂きました。

老化（ボケ）防止にと思い絵を書くのは小学校以来ですが、水彩教室に入学しました、授業は週1回2時間で、早いもので8年になります。腕の方は少しも上がっていません。

絵を描くようになって変わったことは、まったく行かなかった美術館、展示会に行くようになったり、見るものすべて、特に、風景は画材の対象として見るようになりました。

また、年賀状を書くのが楽しみのひとつになりました。

人物画の授業でモデルを目の前にして1時間半程度（2日間）スケッチの貴重な体験をしました。

## ◆ 事務局より

- 和光会会報No.34より「くるま旅くらし心得帖」の山本拓弘氏よりくるま旅について投稿いただいておりますが、今回は2012年九州の旅からを投稿いただきました。

なお、山本拓弘氏の「くるま旅くらし」の最近の様子は下記ブログに載っておりますので是非ご覧ください。

<http://blog.goo.ne.jp/vacotsu8855>  
「山本馬骨」で検索しても可能です。

- ・ 会員趣味のコーナー」では第14回和光会総会の展示作品の中から、常連となりました小藤俊雄さん仏像木彫刻、和田昭喜さんの写真・竹細工、一昨年・昨年に引き続き出展された金山幸雄さんの陶芸作品、それに加え、今回初めての樋口義三さんの水彩画の4人の方の作品をご紹介します。ありがとうございました。
- ・ 和光会の連絡・問い合わせ窓口について  
第6期より会社（人事部）が和光会を全面的に支援して下さることになり、OB会事務作業（会員との連絡・通知、1194・カレンダーの送付等）を人事部の委託によりMTBにお手伝いいただき、MTBの担当は総務・人事支援部（部長：志摩 正樹）で変わりありませんが、会報No.42でご連絡しましたように昨年第13期より連絡・問い合わせ窓口は下記のとおり変更になっております。  
担当：木村 律子BD、佐々木 敏行、野原 菜穂  
電話：03-3803-8865（代表）  
FAX：03-3803-8875  
E-mail：meltec-OB-wakokai@mtb.ssg.meltec.co.jp
- 住所変更等通常の連絡・問い合わせはMTBの上記和光会担当か、和光会事務局（寺門）で済むと思いますが、会社の人事部の窓口は年金・基金を担当している方で次の通りです。  
担当：大嶺 勝則 SK  
電話：03-5810-5392（ダイヤルイン）  
FAX：03-5810-5501  
E-mail：oheki.katsunori@meltec.co.jp
- ・ 2016年度会費納入対象の方は2004年、2007年、2010年、2013年および2014年に入会された方々と、会報No.46でご連絡し、対象者宛に「1194」「和光会会報」送付時振込用紙を同封いたしました。会費「4,000円（2年分）」の振り込みが未だの方は次の口座宛振り込み賜りたくよろしくお願い申し上げます。  
なお、振込用紙を紛失された方は事務局あてご連絡くだされば再度送付いたします。  
振込先：郵便局  
口座番号：00100-7  
口座記号：650896  
加入者名：和光会
- ・ E-MAIL 会員各位へは INFORMATION をお送りしておりますが、最近不達が増えておりますので、**メールアドレスの変更時は速やかにご連絡**をお願いいたします。
- ・ 「和光会会報」・「1194」・カレンダーなどを会員宛送付しておりますが、宛所不在で戻ってくる場合がありますので、**転居・住所表示変更等の場合は速やかにご連絡**をお願いいたします。
- ・ パソコンのある方は、会報や総会写真を下記和光会ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。

<http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Kaigan/5992/>

皆様の日頃の活動やグループ活動などのお便り・投稿をよろしくお願いいたします。

2016-10-10 和光会事務局 寺門 三男  
029-872-4122 [mitsuotera@jcom.home.ne.jp](mailto:mitsuotera@jcom.home.ne.jp)